

ノーモア・ヒバクシャ通信 第70号

2026年2月13日

ホームページ <http://www.nomore-hibakusha.org>
継承ブログ <http://keishoblog.com/>
フェイスブック <https://www.facebook.com/kiokuisan>
X(旧Twitter) <https://twitter.com/nomorehibakusha>

発行者
NPO 法人 ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会
〒102-0085
東京都千代田区六番町 15 プラザエフ 6F
Tel/Fax 03-5216-7757 (直通)
Email: info-kiokuisan@nomore-hibakusha.org
郵便振替口座 00110-5-292881
口座名義 ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会

《目次》

I. 第14回通常総会の予告及び事務所移転の案内	1
II. 被爆・戦後80年「核兵器も戦争もない世界を求めて～記憶を受け継ぎ未来へ～」の開催、そして「ノーモア・ヒバクシャ継承ネットワーク」の発足	2
III. これからの継承を考える第1回ワークショップの報告及び次回の案内	3
IV. 被爆の記憶プロジェクトの取り組み報告	7
V. その他 平和のための博物館市民ネットワーク全国交流会で報告	8

I. 第14回通常総会の予告

トランプ政権のベネズエラ武力侵攻など国連憲章や国際法無視の傍若無人の振る舞いがまかり通りつつあり、国連中心の国際秩序が危機に瀕しています。また、高市早苗政権も、新年度予算の国会審議を先送りして総理大臣の信を問うという前代未聞の「大義なき解散」に打って出るなど議会制民主主義を棄損しています。波乱の幕開けの本年です。「ノーモア・ヒバクシャ」の声を内外に響かせる取り組みをすすめます。

第14回通常総会の予定は、次の通りです。

- (日 時) 5月23日(土) 午後1時～3時
(会 場) 大学生協杉並会館(〒166-8532 東京都杉並区和田 3-30-22)
(議 題) 第1号議案 2025年度事業報告承認の件
第2号議案 2025年度決算承認の件
その他

(新事務所の住所)

〒166-8532 東京都杉並区和田 3-30-22
大学生協杉並会館 509号室
電話/FAX 03-6821-5625 (3月10日より開通予定)

II. 被爆・戦後 80 年「核兵器も戦争もない世界を求めて～記憶を受け継ぎ未来へ～」の開催、そして「ノーモア・ヒバクシャ継承ネットワーク」の発足



核兵器も戦争もない世界を求めて
～記憶を受け継ぎ未来へ～
ノーモアヒバクシャ/NoMoreHIBAKUSHA

参加者募集
締切: 9月20日

2025年
10/11(土)

有楽町朝日ホール
東京都千代田区有楽町2-5-1
有楽町マリオン11F

開場: 12:00
ホワイエ企画 12:00開始
ホール企画 13:00開演

主催・問い合わせ
『核兵器も戦争もない世界を求めて～記憶を受け継ぎ未来へ～』実行委員会 連絡先: 日本青年団協議会
〒160-0013 東京都新宿区西長町4-1 日本青年館5階 E-mail: hibaku80@dan.or.jp Tel: 03-6452-9025

ノーモアヒバクシャ/NoMoreHIBAKUSHA

企画主旨

被爆・戦後80年という重要な節目の年を迎えるにあたり、2024年のノーベル平和賞に日本被団協が選ばれました。日本被団協は、これまで「核兵器廃絶」「原爆被害への国家補償」の二大要求を掲げ、証言活動をはじめとする様々な活動を通じて、ふたたび被爆者をつくらないとの願いを国内外に伝えてきました。こうした長年にわたる努力の積み重ねが、核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)が2017年にノーベル平和賞を受賞したことや、2021年に核兵器禁止条約が発効したことに大きく寄与しています。しかしながら世界から核兵器を廃絶する道は依然として険しいままです。日本政府は世界唯一の戦争被爆国を標榜しながら、核兵器禁止条約への署名・批准はおろかオブザーバー参加すらも拒み続けており、核兵器無き世界への働きかけを行う様子は未だありません。

このような状況だからこそ、私たち市民にはさらなる行動が求められます。次の世代が日本被団協の運動に学び、そして被爆された方々の記憶を継承することを通して、核兵器も戦争もない国際社会を築いていかなばなりません。そのために、日頃から平和な社会の実現に取り組む運動団体が中心となり被爆・戦後80年企画の実行委員会を立ち上げ、年間を通して核兵器廃絶などの課題に取り組む活動の実施を呼び掛けるとともに、平和を願う集会を実施します。

当日のプログラム 12時00分 開場 受付

※12時～15時30分 ホワイエ企画
①ポスター展示 ②戦争経験者と語る③物販 ④メッセージボード作成 ⑤映像から学ぶなどの催しを実施

13時00分 ホール企画開演
オープニング ○開会挨拶 ○オープニングムービー

13時25分 ノーベル平和賞受賞報告

13時40分 朗読劇「そこに声があれば～今、未来に～」
脚本・演出/丸尾 聡 歌詞/山谷典子 作曲/高崎真介

14時20分 リレートーク

15時00分 ホール企画閉演
エンディング ※引き続きホワイエでの催しをお楽しみください

15時30分 ホワイエ企画終了

最新情報はこちら



事務局団体 / 被爆・戦後80年企画実行委員会事務局
日本原水爆被害者団体協議会、日本生活協同組合連合会、日本青年団協議会、新劇人会議、原水爆禁止日本国民会議、原水爆禁止日本協議会、全国空襲被害者連絡協議会、ノーモアヒバクシャ記憶遺産を継承する会、ピースポート事務局、核兵器をなくす日本キャンペーン、一般社団法人かたから

昨年10月11日に開催した被爆・戦後80年企画「核兵器も戦争もない世界を求めて～記憶を受け継ぎ未来へ～」は、会場、オンラインを合わせて300名以上の方々の参加を得、盛況のうちに閉幕し、実行委員会は解散しました。

※ 当日の様子は <https://www.youtube.com/watch?v=iyNNRBD4JU> からご覧ください。

しかし、今回の実行委員会としてのつながりを活かし、今後も継続した意見交換・情報交換の場として継続して活動を維持するため、有志で話し合いを行いました。

本年、被団協は結成70年を迎えます。これまでの成果を、継承のつながり、ネットワークを作っていきたい。強制力は持たないが、各団体の取り組みを共有しあい、必要に応じて参画し合い、協働しあうつながりを持ちたい。今回の実行委員会のような場を継続的に持つため、日本被団協、ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会、日本青年団協議会、日本生協連、ピースポート、核兵器をなくす日本キャンペーンの6団体が事務局団体となり、「ノーモア・ヒバクシャ継承ネットワーク」が発足いたしました。

このネットワークは、各団体が行っている独自の継承活動を尊重しつつ、それらを持ち寄り、情報共有や相互交流を行うことを基本とします。その上で、課題や目的を共有できる場合には、柔軟に共同行動や協働企画を生み出していきます。「この指とまれ」型の緩やかなネットワークとして、固定的な指揮命令系統を持たず、多様な主体が主体性を保ったまま参加できることを特徴とします。

また、記録・資料・証言の保存や活用に関する知見の集約、継承の担い手の拡大、次世代の参加促進などを通じて、核兵器廃絶運動の社会的基盤を強化する役割を担います。運営にあたっては、「ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会」を中心に、関連団体が協力しながら、開かれた形でネットワークの維持・発展を図っていきます。中央組織同士の連帯のみならず、全国各地でそうした緩やかなつながりを持ち、継承活動、核兵器廃絶運動を未来へつないでいきます。

被団協が11月開催を企画中の結成70年イベントへの協力をはじめ、さまざまな継承の取組みをお伝えしていきますので、それらの企画に皆さまも是非ご参加下さい。

Ⅲ. これからの継承を考える第1回ワークショップの報告 及び次回の案内

継承する会は被爆80年の昨年、被爆者がいなくなる時代を目前にして、継承する会が所蔵する史資料を活用しつつ、さまざまな分野における被爆者運動の「継承」のあり方（課題や方法）を考えていくための、ワーキンググループを立ち上げました。

報道分野の方々との予備的な話し合い（6月）を経て、12月13日（土）に、第1回のワークショップを開催（於・プラザエフ会議室）。松田忍さん（昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科教授）が近現代史研究の立場から「日本被団協関連文書の可能性—被爆者運動を歴史的に捉える意義—」と題する問題提起を行い、会場・オンラインによる30人余りの参加者により熱心な議論が重ねられました。

■ 問題提起の概要

1 「戦後史史料を後世に伝えるプロジェクト—被団協関連文書—」（戦後史PJ）のあゆみ

昭和女子大学の松田先生と学生による継承する会への協力は、2013年からの被団協運動史料の整理作業に始まり、その中から2018年、学生有志による共同研究として「戦後史PJ」が生まれました。毎週日曜9時からのオンラインミーティングを年間40回程度開催し、史料や論文を読み合わせ、企画案を検討し、11月の秋桜祭で企画展を開催してきました。

これまでの企画展のタイトルと概要は以下のとおり。

2018 被爆者に「なる」（「被爆者として何かせねば」と立ち上がるには、それぞれのタイムラグがある）

2019 被爆者の「発見」（1977年、85年の調査などをつうじ、社会から被爆者が「発見」されていくプロセスを問うた。その後、被爆者が自らの被害を自覚していくことの意義に気づいてきた）

2020 被爆者の生きてきた歴史

2021 被爆者の足跡—被団協関連文書の歴史的分析から—（昭和女子大学光葉博物館で、1か月余にわたり開催。被爆者運動のあゆみを全体像としてとらえようと試みた）

2022 被爆者の「選択」（原水禁運動に励まされ1956年に結成された日本被団協が、その運動の分裂のなか、自立した被爆者団体として歩み出すプロセスを検討）

2023 被爆者たちが望む未来 あなたが望む未来—「原爆被害者の基本要件」を読む—（「基本要件」（1984年）の策定プロセスと内容を分析。全国の被爆者・関係者の声を聴いて文言を固めていった民主的プロセスが明らかになる）



2024 史料が語る日本被団協の歩み

2025 被団協関連文書をひもとく—私たちと史料との対話—

（被爆者運動を語る時重要と思われる史料を選択し、キャプションをつけて展示。2024年度は音声ガイドも活用。現在活動中の書籍化につながっている）

2. 被爆者運動に関わる専門家 歴史学の関与が少なかったのはなぜ？

医学者・医師、法学者・弁護士、芸術家・文化人、社会学者らに比べて、歴史学者らによる研究は少なく、戦後史PJのようなアプローチで被爆者運動史の歴史的解明をめざす動きはほとんどない。

それはなぜなのか？

被爆者運動が掲げる「ノーモア・ヒバクシャ」や「核のタブー」が絶対的な真理に見えるため、研究する意義があるのか？／被爆者運動を「唯一無二」の運動ととらえる意識が存在し、その研究で広く世界を理解できる道筋が引けるのか？／現在進行中の運動で、二大要求は実現していない…といった理由が考えられるが、「核のタブー」の共有も当たり前ではなく、被爆者運動も戦後日本が生み出した運動で、他の運動との比較は可能。また、二大要求が実現していなくても、「受忍論」を明るみにさせ、核のタブーを世界に広げるなど、運動の成果の歴史的意義は検証可能だ。

原爆被害への国家補償や核兵器廃絶を、被爆者が原爆体験を踏まえて考え続けてきた成果として、歴史的に選択されてきた要求であることを理解することで、それを受け入れる可否かを検証することができる。

「ペリー来航が日本の近代の始まりである」という歴史認識と同じ次元で、「被爆者運動史を念頭に置くことで、日本の戦後史をより深く理解できる」と、被爆者運動を組み込んだ歴史認識をつくっていくことが、歴史学研究の立場からの継承の基盤となる。

3. 継承すべきものは何か？

継承すべきは、「あの日」を中心とした被爆体験ではなく、原爆によって捻じ曲げられた人生の総体としての「原爆体験」。そのなかに含まれるものとして、被爆者運動のあゆ

みもある。

実は、原爆体験の継承はすでに実現中のことだ。被爆者運動の活発だった1970～90年代の運動を担った田中熙巳さんらの世代の多くはすでに亡く、21世紀の運動の盛り上がりを支えてきたのは「若い」被爆者たちだ。先輩被爆者たちの原爆体験や運動の経験を学びながら成長し、ブックレット『被爆者からあなたに—いま伝えたいこと』も刊行。「先輩」の原爆体験を知ることが継承のキイとなっている。

4. 歴史学として被爆者運動に何をすべきか

これまでの研究のなかで、被爆者運動の歴史について、何がしか社会に還元したいとの機運が高まっており、現在、戦後史PJで本づくりの計画を協議している。

現在に至る被爆者の思考を迫体験することが重要ではないか、との認識のもと、「被爆者運動が指し示してきた論点」を整理しながら章立てを考えている。

1) 被爆者運動を知るための手がかり：社会保障ではなく国家補償を求める選択⇒いのち・くらし・こころにわたる原爆被害の全体像の究明⇒「あの日」から被爆者に起こったすべてのこと（原爆体験）への気づきを生み出し、原爆に抗う自立した被爆者に「なる」

仲間と手を取り合い（ヨコの関係）世代を超え学び成長するタテの関係

人びととともに、専門家や市民、世界の人びととともに歩む被爆者運動

世界に語りかける被爆者たち（NGOシンポ、SSD、国際法廷運動、NPT、ヒバクシヤ国際署名…）

2) 被団協関連文書の可能性

伝えるための「仕掛け」として、論点を説得的に示す史料の掲示や、被団協文書を利用した模擬授業案（先生向け）、中高生の調べ学習のネタになりそうなコーナー、なども考案中。

5. おわりに — 歴史学研究の分野から考える継承とは…

「被爆者運動とは何か」を明らかにし、被爆者が歩んだ道のりを歴史像として広く共有する、被爆者の存在を組み込んだ戦後史像（歴史認識）の形成にある。水俣病など戦後の他の運動との比較もしてみたい。

■ 問題提起を受けて～討論のあらまし～

以上を受けて、事務局の栗原から継承する会が所蔵する史資料の現状、被団協結成以来の二大要求と「受忍論」への抗いについて、さらに戦後史PJによる展示の企画をとおして原爆被害への理解が深められた事例として、2021年の特別展で、石田忠による被爆者に拮抗してはたらく二つの力（〈漂流〉と〈抵抗〉）を、観る人たちにどうしたら伝えられるかと工夫し作成した「雨の図」を紹介しました。

その後、会場・オンラインの参加者による討論が行われました。

▶ 両親が広島で被爆、母親は自分が4歳のとき亡くなり、生まれた弟も死亡した。被爆二世として、自分のことはいいが、子どものことが気になり、声をあげるにはためらいがある。

国家補償をめぐるっては、民主主義国家では国家とは我々自身の問題でもある。犠牲を強い

てはならない被害とは何かを我々自身が明らかにし、「特別の犠牲」を強いられない権利を求めていく必要がある。

- ▶ 2018年の被爆者に「なる」の展示の頃、武蔵大の学生とともに勉強した。活動の冊子や調査原票のことばを読みといて、発見していった。日本社会は涙を流している人がいても動かないと言われるが、そんなことはない。被爆者たちは試行錯誤しながらも成果をあげてきた。その証拠があると見つけたとき、学生たちは変わっていく。継承する会の活動は、若者らに響く可能性をもっている。何かが固まっていく過程の展示が心をうつ。
- ▶ 去年まで22年、立教で研究していた。韓国では、国家権力の研究PJに属しているが、被爆者の問題は欠かせない一つのテーマだ。広島でも運動記録の保存をどうするか、つねに相談しているが、“ノーモア・ヒバクシャ”には在朝、在韓も入り、いっしょに教育できるものとしてやっていくべきではないか。市場（淳子）さんの史料も、韓国では「戦後処理」に入れられているが、もっと普遍的な“ノーモア・ヒバクシャ”の史料の共有ができれば、全体が見えるようになるのではないか。
- ▶ 3歳のとき広島で被爆し、3年前に目覚めた。大戦の総括がなされていないので、言えない部分もある。被害の実相を知り、語るとともに、戦争の不条理さをもっと訴えねばと思う。
- ▶ 長崎・広島では、継承はやって当たり前。どのように、何を継承するかは語られるが、なぜ継承しなければならないのか、はなかなか問題にならない。PJの学生さんらのように、言語化し伝える努力が必要だ。原爆資料館では展示が更新されているが、公的資料館には被爆者運動の展示はほとんどない。
- ▶ アメリカの公文書館の原爆・核実験資料を収集し、分析・研究してきた。ABCCに資金提供してきたのは米原子力委員会。米軍による広島・長崎の医学調査史料は当初から軍事機密扱いだ。肥田先生の著書によれば、70年代に国連に援護を訴えたとき、国連は日米政府から「死ぬべき者は死んでおり、今はもういない」と報告を受けているのでその必要はない、と答えたという。日米政府は隠したい。被団協がギリギリのところまで国家補償を求めるスタンスをとったことは、歴史的な意味をもっている。
- ▶ ノーベル賞をきっかけに、メディアも受忍論に一定の関心を持ち始めている。受忍論がなぜ日本社会で続いているのか。戦後史に、被爆者や空襲被害についての戦争責任を位置づけていく必要がある。それを支える国民の無関心や日本社会の問題性にも、被団協と空襲被害者が連携しつつ研究をすすめ、切り込めればと思う。
- ▶ 日本政府の核廃棄物の海洋投棄や仏核実験をめぐる国際署名を広げ、マーシャル諸島の人々の反対運動と協力してきた。核実験や核開発被害者などグローバル・ヒバクシャとの協力に、問題が広がっていくことで水がうすまるとの批判もあるが、それは矛盾ではなく力を強めていくことにつながる。共有性をもって広げていくことを重視したい。

おわりに — 松田先生から

・ピンチはチャンスだ。危ない時代、戦争が起きたら同じことが起きる。今だからこそ、この運動について、聴く土台がある。

・継承する会に言いたい。光葉博物館での「被爆者の足跡」展の英訳がすばらしかった。

“Enduring Legacy Left by the A-and H-Bomb Survivors (朽ちることのない被爆者の遺

産)。

ネットに出していくときに参考にすべきは、企業アーカイブだろう(森永製菓、清水建設 etc.) いつまでも残り続けるレガシーを伝えていくHPをつくってほしい。

■ 次回〈継承〉ワークショップのお知らせ

第2回 これからの〈継承〉を考えるワークショップは、以下のとおり開催します。

◆ 日 時：5月9日(土) 13:30~16:00

◆ 場 所：大学生協杉並会館 会議室(オンラインによる参加も可)

東京都杉並区和田 3-30-22/電話/FAX 03-6821-5625

◆ テーマ：被爆者たちの〈原爆〉とのたたかいと子どもたちの未来

◆ 問題提起者：

・ 糺谷 陽子さん(継承する会理事、元中学校社会科教師)

子どもたちに伝えたいこと~いまの歴史教科書と日本被団協ノーベル平和賞受賞を受けた文科省「学習指導案」を読む~

・ 佐々木 孝夫さん(しらさぎ会理事、元中学校社会科教師)

被爆者の声から学ぶ~その可能性と課題~

今回は教育の分野から、これからの〈継承〉をめぐる課題や方法を考え合います。豊富な教育実践や教育研究・運動の経験をもつお二人から、問題提起をしていただきます。周囲のみなさんにも呼びかけて、ぜひ多数ご参加ください。

参加申し込み等詳細は、追ってお知らせいたします。

IV. 被爆の記憶プロジェクトの取り組み報告

2025年度は「一緒に考えよう!これからの継承のカタチ」をテーマに毎月イベントを開催し、1月までに155名の方に参加いただきました。全国証言マップに掲載した朗読できる体験記は2編、小学校低学年向け音読読み聞かせ用体験記1編、証言動画1本を作成しました。今年「私たちが伝える」をテーマに活動を進めていきます。(島村)

夏休み親子企画「子ども記者になって被爆体験を伝える新聞をつくろう」を開催

未来につなぐ被爆の記憶プロジェクトでは、これまでも夏休みと春休みに親子で参加するイベントを開催してきました。昨年は新たな挑戦として「子ども記者になって被爆体験を伝える新聞をつくろう」と題し、夏休みに全2回のイベントを開催しました。

夏休みの宿題にも
びったり!

子ども記者になって 被爆体験を伝える 新聞をつくろう

「新聞づくり」を通して親子で原爆や戦争について語り、考えてみませんか? 自分なりのことや知りたことは、小谷さんに聞いて新聞にまとめ、クラスのお友だちに伝えよう。

小谷陽子さん
「原爆の時に広島で被爆。2歳の弟さんは原爆で亡くなりました。被爆体験を書き、今は教師として広島での体験を伝えています。」
「人を思いやる心からこそ、世の中の流れを変えられることができます。みんなが力をあわせていると感じています。」

第1回	第2回	必ずお読み ください
原爆について知ろう	被爆者の方に お話を聞いてみよう	QRコード
7/26(土) 13:30~	8/4(月) 18:00~	
原爆の被害について知り、 調べたことを新聞にまとめ ていきます。	被爆者の小谷さんにインタ ビューして、被爆体験や小 谷さんの願いを伝えます。	

※両日ともオンライン開催です。
【主催】特定非営利活動法人「ピース・レポート」国際被爆者支援センター
【協賛】特定非営利活動法人「ピース・レポート」国際被爆者支援センター

1回目は「原爆について知ろう」ということで、被爆者の方のお話をよく理解できるように当時の暮らし、原爆についての知識をPowerPointを使って勉強しました。動画やイラスト等をいれながら、小学校低学年からでも理解しやすいようにしました。当時の食べ物を今再現したらどんな感じかな？と少しでも当時の生活を身近に感じてもらえるように工夫しました。2回目は小谷孝子さんと中村紘さんをお呼びして、小谷さんから腹話術で被爆証言をしてもらいました。子どもたちは腹話術でのお話ということもあり、お話しに夢中になってくれました。感想や質問もたくさんで、真剣にお話しを聞いている様子が伝わりとても嬉しかったです。

イベントの最後に作った新聞を発表する機会があったらいいねということで、急遽3



回目のイベントを開催することを決定！作成した新聞を発表する会を開きました。小谷さん、中村さんもお招きし、発表をきいてもらいました。一方通行のイベントではなく発表を通じて、子どもたちの真剣さや無邪気さが小谷さん、中村さんにもよく伝わり、とても喜んでもらえました。私達もイベントを大成功で終えることができ安心しました。

子どもたちは実際に当時の食事を家族で作って食べた様子を新聞にしたり、新聞作りをきっかけに家族で平和について話す機会にもなったようでした。原爆や戦争の話題となると重たく感じご家庭でお話しをする機会がないかもしれませんが、当時の食事、遊びを再現するだけで、少し気楽にいろいろなお話しができるんだなと発表をききながら感じました。今年も同じような企画を予定しておりますので、しっかり準備を重ねながら被爆者がいなくなったあと、子どもたちにどうやって継承をしていくのか考えていきます。今後とも応援よろしく願いいたします。（並川桃夏）

V. その他 平和のための博物館市民ネットワーク全国交流会で報告

2026年2月7日、平和のための博物館市民ネットワーク全国交流会が京都みやこめっせで開催され、本会からは事務局員の平井朗が参加し、「原爆体験を世界に～オンライン展開から継承センター設立へ～」と題し、継承の意義を問う報告を行いました。運営委員会および11団体からの報告と討論を通して、現在の平和のための博物館の課題と展望を共有し、議論が深められました。